ここんいちにょ　第５号

# 古今一如

— 糸魚川歴史民俗資料館《相馬御風記念館》だより —

発行日　平成23年9月14日
編集・発行　糸魚川歴史民俗資料館
〒941-0056　糸魚川市一の宮1-2-2
TEL・FAX　025-552-7471
URL　http://www.city.itoigawa.lg.jp/
E-mail　bunka@city.itoigawa.niigata.jp

## 企画展の開幕にあたって

館長　小林　強

3月11日に発生した東日本大震災から半年が経ちました。被災された皆さまに改めてお見舞い申しあげますとともに、一日も早い復興を心より祈っております。

震災後、短期間ではありましたが、南相馬市の方々が当市に集団避難されてきました。郷土の文人・相馬御風の祖先は、江戸時代の初めころ、福島県相馬地方から糸魚川に移り住んだといわれています。御風ゆかりの地の皆さまをお迎えし、微力ながらお手伝いができたことに対し、一方ならぬ縁を感じずにはいられません。

さて、相馬家は代々宮大工の棟梁として名字帯刀を許された旧家でしたが、御風の父・徳治郎は家業をやめて公事にかかわり、町会議員、助役を経て初代糸魚川町長を務めます。徳治郎が政治にたずさわった22年間、町内では天然痘や赤痢が流行し、大雪等天災や二度の大火にも見舞われました。住民のために、時間も財産も「すべてを投げうって」奔走する父の姿を、御風はどのように感じ、受け止めていたのでしょうか。

徳治郎没後の大正11年2月3日、北陸本線勝山トンネル西入口付近（現糸魚川市青海地内）で列車が大雪崩に遭い、90人の尊い命が失われます。御風は、糸魚川駅に運ばれる多くの遺体を収容場所へ搬送する指示を出す「世話役」を献身的に務めました。

食ひがけの餅をそのまま握りたり
むくろもありきあはれそのむくろ
血にみちし雪さへいつか消えはてて
春はほのぼのめぐり来むもの

この災害に際して御風が詠んだ短歌四首のうちの二首です。前者は、その惨状と被災者への哀悼を表し、後者には、今は悲しくとも時がたてば必ず「春」はやって来る――というメッセージが込められているものと思います。

このように、短い言葉の中に折々の出来事が綴られる詩歌は、作者のセンスや芸術性が現れるだけでなく、当時の状況や心境をかいま見ることができる貴重な研究資料といえるでしょう。

前置きが長くなりましたが、来たる10月7日に開幕する秋季企画展では、御風がライフワークとして打ち込んだ短歌の創作、そして日本の詩壇に大きな影響を与えた「口語自由詩」の提唱にスポットをあてます。

展示資料は、御風の著作や書などの作品のほか、交流のあった詩人や歌人の書簡など約150点を予定しています。

最後に、御風は「大きな災難に遭って、肉体のもろさ、物の果敢なさを痛感すればする」ほど、「心の尊さを感」じ、「滅びゆく物のうちにも滅びない生命を味わふ」ことこそが私達の『歌ごころ』の真の求めである」と述べています。

また、心を養い、豊かにしてくれる詩歌は、「多忙繁雑な生活に於けるオアシス」であるとも述べています。

このような、現代にも通じる御風のスタンスも味わいながら、展示資料を鑑賞していただければ幸いです。